

## すべての人に読書の喜びを

### 本間一夫

日本最大の点字図書館の正面を飾る無数の鎖。これは流れ落ちる滝を表しています。



「現在の日本点字図書館」  
〔日本点字図書館蔵〕

「視覚に障がいの

ある人々に豊かな知を提供したい。」  
そんな願いが込められています。この滝の最初の一と滴となったのは、一人の盲目の青年が抱いた志でした。

日本点字図書館の創立者・本間一夫は一九一五年、増毛町の造り酒屋やニシン漁の網元などをする家に生まれ、周囲の人たちにとてもかわいがられながら育ちました。しかし、五歳の冬、雪の中で遊んでいると突然激しい頭痛に襲われ、高熱が何日も続きました。\* 脳膜炎という病気にかかってしまったのです。一命はとりとめたものの、この病気により徐々に視力を失っていきました。失明してから、長

く療養生活を送ることになりましたが、一夫は少年雑誌や児童文学を毎日のように読み聞かせてもらったおかげで、とても読書好きな少年に成長しました。しかし、同じ年頃の子どもたちの中には学校に通えず、大好きな本も自分の力では読めず、本を触り「ああ、これはちよつと紙が厚いから写真かな。」と思っても読めない、そんなものどかしい日々を送っていました。

十三歳になった一夫は、函館に移り住み、盲学校に通い始めます。初めて学校を訪れたとき、先生からあるものを手渡されました。

「本間くん、これを触ってごらん。」

「大きな本だな。何だろう…、ザラザラしている…。」

「それは『点字毎日』という新聞だよ。ここで点字を覚えれば、君は自分で本を読めるようになる。」

「これが読める文字なのだろうか。」

一夫と点字との出会いの瞬間でした。それからというもの、一夫は点字の本を読みあさりました。一夫にとって点字の習得は、初めて人の手を借りずに読み書きできる「自由」の獲得であり、それは、何にも例えようのない喜びでした。しかし、当時、点字の本は鍼、灸、マッサージの

ものがほとんどで、一般の読み物はほんの少ししかありませんでした。「せつかく点字を覚えたのに本がない。もつと点字の本は出ないものか。」と一夫は日頃から点字図書ひごろうの不足を嘆なげいていました。ちょうどその頃ころ、一夫は、自分と同じように幼いときに失明し、その苦悩くのうから立ち上がった岩橋武夫いわはしたけおの講演会に参加します。「ぼくは、目が見えないから、マッサージ師や盲学校の先生になるしかないと思っっていたけれど、頑張れば何か新しい道に進めるのだろうか。」と考えるようになりました。さらにその頃、イギリスには何十万冊もの蔵書をもっている点字図書館があると、いうことを本で知り、胸が踊りました。

「これだ！」とすべてが結び付き、一夫は「自分の手で、日本に大きな点字図書館を開こう。」と決意しました。

一九三六年、一夫は図書館を開く準備のため、視覚障がい者を受け入れていた関西学院大学に進学しました。卒業後は点字雑誌の編集の仕事をし、一九四〇年、東京の自宅に「日本盲人図書館もうじん」を開きました。七〇〇冊の点字図書と四本の書棚しょだなからのささやかなスタートでした。

図書館を開くにあたり一夫は「どうやって蔵書を増やしていくたらよいか。点字の本といってもやはり鍼や灸の

本が多いし……」そのとき、手を差しのべてくれたのが社会教育家の後藤静香ごとうせいこうでした。静香は一夫の志に共鳴し、「イギリスやドイツでは点訳奉仕運動しんどうが非常に盛んなんだ。日本でもこれを始めればきっと協力してくれる人は全国にいるはずだ。」と自ら運動を行いました。すると、この運動が全国に広がり、点訳奉仕者が徐々に増え、点訳された名著が次々と日本盲人図書館へ届けられるようになりました。一夫の本の貸し出しと、一般図書を点訳する奉仕者との協働が、利用者に「本を読む喜び」を伝えることを可能にしたのです。

すぐに本の置き場はなくなり、一九四三年、全国からの寄付により、現在の場所（新宿区高田馬場）に二階建ての図書館棟とうを建て、図書館の運営は順調に発展するかに見えました。

しかし、戦争がそれを許しませんでした。戦争は激しくなり、空襲くうしゅうがいつ東京にあつてもおかしくない状況じょうきょうに



「日本盲人図書館」  
〔日本点字図書館蔵〕

なりました。そのため一夫は、点字図書とともに茨城、さらに増毛の実家に疎開そかいしました。その間も郵送で点字図書の貸し出しを続けていましたが、一九四五年五月、東京から電報が届きました。

「図書館全焼、一物いちぶつも残さず。」

空襲で住居もすべて灰になってしまったのです。

その一方で、一夫の耳には、貸し出しを希望する声が途絶たえることなく届き、点訳奉仕者による点訳図書の寄付も続けられました。

「戦争の中、みんな、自分のことだけで精一杯せいいつぱいなのに。」

一夫にとって言葉では言い表せないほどの感謝はげと励みはげになりました。それから一夫は、壊こわれた背表紙を着物の布で補修し、破れたページには伝票を再利用して補修しながら、全国の利用者のもとへ点字図書を送り続けました。

やがて、戦争は終結し、

終戦後の二年半は、増毛から図書の貸し出しを行いました。

図書館が再建されたのは一九四八年のことです



〔日本点字図書館蔵〕

た。このとき、日本盲人図書館は「日本点字図書館」と名を改め再出発しました。しかし、戦後のインフレ\*により資金繰りは厳しく、日々寄付金集めに走り回りましたが、増える本の置き場はなくなり、どんなに頑張っても経営は苦しくなる一方でした。

「一体どうすれば…。」

やむなく、一夫は、それまで無料を原則としていた図書の利用を会費制とし、貸し出しを継続けいぞくしました。

一九五三年に転機が訪れました。一夫は「朝日社会奉仕賞」を受賞し、ようやく点字図書館の仕事が社会に広く認められるようになったのです。国からの予算がついたことで建物は大きくなり、点字図書の出版も始めました。また、テープに朗読を吹き込んだ「声のライブラリー」を始め、点字の読めない人でも読書を楽しめるようにしました。

一夫は、外国の進んだ福祉政策を学ぶため、アメリカやヨーロッパを巡り、まだ日本にはなかった視覚障がい者用の生活用具約一五〇点を収集してきました。これをきっかけに、視覚障がい者用の用具の開発、制作、販売はんばいも行うようになりました。こうして、日本点字図書館は、利用者一人一人の生活ニーズに合わせたサービスを行い、国内外か

ら一万数千人もの人々に利用される日本最大の点字図書館になったのです。

一夫はとにかく人が好きでした。どんなに忙しいときでも来客があれば喜んで会いました。それは、多くの愛と善意の人々にめぐり合い、励まされ、支えられた人生であったからです。かつて日本盲人図書館の頃、一夫は世界に一冊しかない点訳図書に「本書の点訳を感謝して」と、点訳した方の紹介を直筆で添えていました。その点訳者がどこの方なのか、若い方か、お年寄りか、また、点訳を始めた動機などが書かれていました。それは、点訳した方のとが具体的に分かれば分かるほど、利用者の心に感謝の思いがはつきりと湧いてくるだろうと考えてのことでした。

一夫は点字図書を通して点字文化を広めるとともに、たくさんの人たちに強い絆を育んでいたのです。

一夫は、一九四〇年に次のような言葉を残しています。  
「権利において、義務において、\*晴盲二つの世界があくまでも公平でなければならぬ。」

見えない人たちが見える人と同じように暮らすために必要な情報を伝える場をつくりたい、そんな一夫の志は、今も生きて日本点字図書館を前進させています。

一九一五	増毛で生まれる。
一九二〇	脳膜炎により失明する（五歳）
一九二九	函館盲啞院 <small>（もうあいん）</small> に入学し点字に出会う（十三歳）
一九四〇	『日本盲人図書館』を創立する（二十五歳）
一九四四	点字図書とともに茨城に疎開する（二十九歳）
一九四五	増毛に疎開する（三十歳）
一九四八	『日本点字図書館』に改名する（三十三歳）
一九五三	『朝日社会奉仕賞』を受賞する（三十八歳）
一九六四	『世界盲人福祉会議』に参加し、欧米各国を視察する（四十九歳）
二〇〇三	『第一〇回井上靖文化賞』を日本点字図書館と連名で受賞する（八十七歳）
二〇〇三	東京で死去する（八十七歳）

\*脳膜炎：脳の周りをおおっている膜（髄膜）に、ウイルスなどによって炎症が起こる病気

\*点訳：点字に訳すこと

\*インフレ：物価が急激に高くなること

\*晴盲：目が見える人と見えない人